宮城から、伝えたいこと。

Baton

つながれ、どこまでも

バトン
VOL.
10
FROM MIYAGI

特集

できるひとが できることを。

きて・みて

【語り部】気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館（気仙沼市）

【伝承施設】石巻市震災遺構大川小学校（石巻市）
東日本大震災遺構 旧女川交番（女川町）

テーマ：
災害と多様な視点

あしたのクリエイティブ アイリスオーヤマ株式会社の「低温製法米」

バトン とは　世代や地域を越えて広く「伝える」、リレーのバトンのように「つなげていく」という意味を込めています。
県内外や幅広い世代の方々が復興・伝承に興味を持ち、被災地へ足を運んでいただくことを目的に発行しています。

できるひとができることを。

特集テーマ

災害と多様な視点

災害から立ち上がるとき、
「男性だから」「女性だから」「若者だから」
「高齢だから」「住民だから」「よそ者だから」で
できる・できないを判断するのではなく、
「わたし」ができること・大切だと思うことをする。
性差や立場に関係なく多様な動きが生まれることが、
復興の後押しになり、
豊かな未来づくりにつながるはずです。

災害が起きたとき、まず感じるのは無力感。想像もしていなかった被害に直面すると、何もできない自分、備えをしていなかった自分を責めたくなるものです。また、被災をしていない場合でも、現地の人をどうサポートするといいのか、自分にできるのかなど、迷いが生じる方も多いと思います。

しかし、誰にでも、少しずつでもできることが必ずあります。大切なのは、そこに多様な視点があること。復旧や復興に向けて方針をまとめていくことは必要ですが、その地域をよく知る人、外からの視点で俯瞰して見られる人、これからも暮らし続ける人、新しく暮らし始める人など、様々な立場でそれぞれにできることを考え、行動していくことも地域の未来にとって大切なことです。

今回は、2019年の東日本豪雨をきっかけに自伐型林業を実践し山と地域を守る活動を行っているWoods&People MARUMORI代表の刈田路代さんと、東日本大震災後にボランティアで南三陸町を訪れて以来、まちづくりや全国各地の被災地支援など多方面で活動を行う大場黎亜さんに、活動のきっかけや続ける理由をお聞きしました。

Woods&People
MARUMORI
代表刈田路代さん

山を守ることは持続可能な暮らしの第一歩。手探りで進める自伐型林業。

刈田路代さん（写真右）は仙台市生まれ。画家として活動する一方で障害者支援NPO法人で働き、夫と共に古本店「スローバブックス」も運営。丸森町生まれの齋藤百合子さん（左）と。

きっかけ

台風19号の被災地で

2019年9月の東日本豪雨（台風19号）で全国最大の被害を受けた自治体、丸森町。大雨は阿武隈川支流の堤防決壊や土石流を誘引し、町役場も内水氾濫によって孤立しました。死者・行方不明者11人に上ったその爪痕は今も人々の暮らしや風景に残ります。

この被災をきっかけに誕生したのが任意団体Woods&People MARUMORI（通称ウッピー）です。テーマは〈森と人との関係を結び直す〉。代表の刈田路代さんは「山の力を保つ担い手を増やすこと、それが生業となることをめざし、自伐型林業を実践しています」と語ります。自伐型林業とは、木の伐採や搬出、販売などを自分で行う小規模・低コストの経営形態。重機やチェーンソーを扱える人材は技術系災害ボランティアとしても活躍します。

丸森の風土に魅入られて移住した刈田さん。山仕事とは無縁でしたが、夫と共に被災現場を歩いて荒れた山を目の当たりにしたことが転機となりました。そもそもここ阿武隈山地一帯の地質は風化しやすい真砂土（花崗岩）。太古から崩落を繰り返しながら地形を更新してきた一方で、戦後は樹木を皆伐して売り、再び植林するという山林政策がとられました。それは経済的利益を一時的にもたらす半面、土壌の保水力をさまたげ、山の価値を弱めてしまったのではないか――。

気づき

山林保全と安全な暮らしは表裏一体

実は丸森は2000年代に重要な災害を経験しています。「豪雨で土石流が多発した廻倉地区では2002年に大規模な山火事が発生したんです。樹木が焼き尽くされると土壌が乾燥し、後に植えた木も根が十分に張りません。保水力が弱くなった崩れやすい土質の山に大雨が降り、土石流が発生した。私たちの暮らしは自然本来の力によって守られていたと肌で感じました。山を守ることは安全を担保することです」と刈田さんはまっすぐな目で語ります。

刈田さんには自宅近くの土砂崩れ現場で忘れられない光景があります。それは70代の男性がチェーンソーを担いでさっそうと現場へ向かう場面。自信と誇りに満ち、これこそが持続可能な暮らしの象徴だと気づかされました。

ウッピーで広報などを担う齋藤百合子さんは別の体験からそれに共感を抱きました。「豪雨で屋敷脇の道路が崩れて通れなくなった時、災害支援団体のオープンジャパンがあっという間に重機で土砂をどけてくれたんです。その後、ボランティアを通じ、公道から玄関先まで道をつけることは復旧の第一歩であることや、道は被災した人の希望の光につながるなど、重機の重要性を感じ、自分でもそんな道を通せる人になりたくて重機の免許を取りました」。そして同時に山の在り方を考えるようになり、山主である父から所有林5・7ヘクタールを提供してもらい、ウッピーの研修林「親林」としました。

- **2002** 丸森町廻倉地区で大規模山林火災
- **2009** 刈田さん丸森に移住
- **2011** 東日本大震災。町内では放射能汚染により農産物出荷に制限がかかる
- **2019** 東日本豪雨（台風19号）。3月12日夜半からの大雨で町内各所に被害
- **2022** Woods&People MARUMORI設立

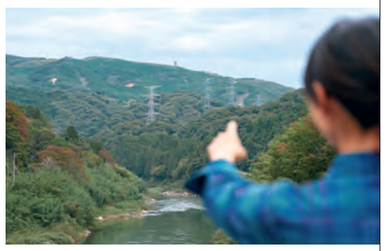
齋藤さんがショベルカーを操り、刈田さんが丸太を切る。この丸太はオープンジャパンが自らの実習用にも購入してくれた。「とにかく安全第一」と刈田さん。

学び

作業道を切り開く

研修林での実践は、徳島県の自伐林家・橋本光治さんの指導を受けての作業道づくりがメイン。ショベルカーや林内作業車が入れる程度の幅2㍍の道を高密度で開きます。これは山の傷みを抑え、かつ大雨が降っても崩落しない、災害を食い止める知恵と知識、技術あってのもの。微妙な沢筋を読み取り、雨水が通る「水道」と直角に交差するよう作業道を付けるのがポイントです。

橋本さんが見本で作ってくれた作業道は、沢音が軽やかで心地いいものになったとか。「地形を読み取るのが難しくて。それに丸森の山は大きな石が多いのも難儀します。橋本さんからは『20年続ければわかるようになる』と励まされますが……」と刈田さん。齋藤さんは「キノコや山菜を見つけたりして、森はこんなに綺麗で楽しいのだと改めて知りました」と語ってくれました。



廻倉地区の山を見上げる。山肌がむき出しになっているのが土砂崩れの跡。一帯には風力発電施設の建設計画があり、「崩落の危険性が増すのでは」との危惧も浮上している。

これからの展望

生業の創出へ

会員十数名のうち実作業ができるメンバーは6～7名。それぞれが災害支援やツリークライミングなどのエキスパートで「小型車両系建設機械3t未満」の免許を所持します。重機の購入や燃料代には「宮城県みんなの森林づくりプロジェクト推進事業」の補助金を充てています。

仲間と共に技術を習得し、自伐型林業に生業として取り組む人を一人でも増やすのがウッピーの目標です。そこに至るには時間がかかると刈田さんは見ています。「ゆくゆくはこの研修林と私の夫の10haの所有林を合わせて、杉だけでなく広葉樹も育つ針広混交林としたいと考えています。私たちの取り組みは『ハチドリの一滴』かもしれないけれど、一歩ずつ前に進んでいきます」。

共感してくれる仲間を増やす手始めとして、だれでも参加できる体験研修会や、子どもたちを対象としたワークショップを開催するなど、山の大切さを伝えています。

自伐型林業の先駆者である橋本光治さん指導のもと、作業道は少しずつ延長している。木漏れ日が美しい休憩中のひとこま。

株式会社Plot-d
一般社団法人東北GYROs
大場黎亜さん

できることを丁寧に続ける それが、町と人のためになる

当時の状況

南三陸町に通いながら見つけた自分の役割

東日本大震災が起きた2011年。早稲田大学に通う学生だった大場黎亜さんは、ボランティアとして初めて南三陸町を訪れます。そこから定期的に東京と南三陸を行き来する生活を経て、結婚を機に南三陸町民に。その後、多角的な視点からまちづくり・ひとづくりを目指す株式会社Plot-dや、森づくりからひとづくり、まちづくりへとつなぐ一般社団法人東北GYROsを設立したほか、地域行事の実行委員や役員、協議会員なども幅広く務めています。今年からは、宮城県の農村漁村集落情報発信支援員の一人目としても活動。「南三陸町で暮らすことになるなんて、当時の私は考えもしませんでした」と、振り返る大場さん。「でも通うようになってからは、よそ者である自分の役割があると思いました」と言葉を加えます。「ただまちに溶け込もうとするだけじゃなく、外から来た私だからこそ見える視点を持つことや多様な立場を理解することが役割だと思って。防災でも、まちづくりでも、山との関わり方でもそう。いろんな立場の人がいるからこそみんなで考えよう、ということはいつも意識しています」。

復興のきっかけ

自分を開いていった結婚前の積み重ね

2017年に南三陸町出身のご主人と結婚。しかし町民になるのに2年近く待ってもらったそう。「〝ボランティアのれいあちゃん〟で見せてきた自分は、何でも地域のためにやれることをやるスタンスだったけど、町民になるなら、この地で〝自分のため〟も意識して生きていく必要があると思った」と話す大場さん。結婚しても、全国を飛び回るような仕事や災害ボランティア、新たな挑戦などをできるだけやっていきたいという自分の生き方を受け入れてもらうために、地域行事に参加したり交流したりと、それまで以上に自分自身を知ってもらう時間をたくさんつくったそうです。

また、結婚後すぐに地域にある神社の氏子青年会の一員になったり、まちづくり協議会の役員になったりと、積極的に地域の取り組みに入っていきました。「一方的に私のやりたいことを伝えるより、まずは皆さんが苦労しながらも大事にしている場に飛び込んで共に活動しながら〝私はこう思うよ〟〝こんなことができるよ〟と自分を開いていきました。そこに丁寧に時間をかけてきたからこそ、今では地域の方から理解していただいたり、頼っていただけたり、私のやりたいことをバックアップしていただけるような関係を築くことができました」。

様々な人とつながり、〝私〟を認知してもらう。人々の懐に飛び込んでみることは決して容易ではなかったけれど、対話と共同作業を重ねていくことで、大場さんらしく南三陸町の町民へ仲間入り。「ここ数年、自分が新たにチャレンジしている森づくりの活動や被災地支援の活動についても、たくさんの方から応援していただいて、地域の人から〝あんたのやってきた十数年の活動が、今、形になっているんだろうね〟と言っていただきました。これまで積み上げてきた地域のみんなとのつながりがあるからこそ、言葉にしなくても理解してもらえていることが多く、支えられています」。

「能登半島での活動中、出会ったおばあさんから〝あんた、落ち着く顔やね〜〟と言われたんです」と笑う大場さん。柔和で朗らかな人柄も印象的だ。

感じた課題

すれ違いを改善する役目に

2024年元日に発生した能登半島地震。そして9月に起きた豪雨被害。大場さんは現地でのボランティア活動だけでなく、現地で頑張る方々や長期ボランティアたちのフォローも大事にしています。ボランティア運営にストレスを感じていないか、負荷がかかりすぎている人がいないか。大場さんは関係者の中で生じるすれ違いを放っておくことなく、時に間に立ち、また時にはサポート役を担いながら、被災地支援が円滑に進むことに力を注ぎます。

「被災地の復興のためにという思いはみんな同じ。一人一人できることやモチベーションは違うけど、ゴールの目的は一緒だから、それを見失わないように支えていきたいと思っています。ボランティア運営の環境が良いことも復興につながるひとつの要因になると思うんです。支援に必要な接続点が多く見えているのは、南三陸町で今日まで学んできたことや全国各地の被災現場での活動を経験させていただいたからこそ。だから私は、長期ボランティアや自分たちの地域のために頑張る地元の人たちのサポート役を担い、支援のバトンをつなげる役割に徹することも、私にできることの一つだと思っています」。

これからの展望

自分が得た言葉で伝え続けていく

仲間たちと立ち上げた東北GYROsの活動は「自ずと防災の力になる」と力強く語ります。活動で身に付けたスキルは災害発生時の初動や二次災害の防止にも役立ち、さらにそのスキルを誰かに共有することで、人材育成にもつながる。「まだまだ勉強中ですが、それでも山と向き合うようになって、自然災害との向き合い方も変わっていったように思います」と話します。

一方で、次世代へのバトンの渡し方が課題と言います。「震災後、私はたくさんの方々との出会いと経験のおかげで視野が広がりました。このバトンを次世代に、重荷にならないように渡したい。自分もまだ頑張りながら、しっかり未来につなぎたいですね」。

取材中にも地域の方から声をかけられていた大場さん。偶然通りかかった、長い付き合いだという〝たかちんさん〟は、大場さんのこれまでの活動を見守り続けてきたひとり。

3.11後の出来事

2024 能登半島でのボランティア活動開始

2022 一般社団法人東北GYROsを設立

2019 株式会社Plot-dを設立

2017 結婚し南三陸町民に

2014 最年少で南三陸町復興応援大使に任命される

2011 ボランティアとして南三陸へ。南三陸に通いボランティア活動を続ける

collaborated with せんだいタウン情報 machico

vol. 10

machico防災部といっしょ

今回のテーマ

女性の防災対策ってどうしたらいいの？

machico会員（40代女性）

＼体験してみた人／
machico防災部員
ぷりぱん

今や日常の一部になりつつある防災。
日頃の備えや災害時の避難所生活に女性の視点を生かせば、
より安心感のある環境が整うはず。
突然の事態にも対応できるよう、普段から考えておくことが大切です。
今回は、「働き世代の女子防災プロジェクト」の代表、北村育美さんに、
女性が地域防災に参加する意義や関わり方についてお話を聞きました。

＼教えてくれた人／
働き世代の女子防災プロジェクト 代表
北村育美さん

machico編集部（以下ⓜ）：「単身、独身、働き女子のための防災カフェ」など、北村さんが女性と防災をテーマにした活動を始めたのはなぜですか。

北村さん（以下北）：2019年に福島で台風19号を経験したとき、防災の仕事に長く携わっていながらとても不安だったんです。「避難させて」と言える友達が近くにいないと実感して。単身の女性は自分で避難もできますが、頼れる人も必要です。転入の多い仙台では、同じように不安を抱えている人が多いと思い、今の活動をスタートしました。

ⓜ：地域交流が大事と聞いても、女性一人で参加するのは難しいですよね。

北：そうなんです。町内会に女性役員が少ないこともあると思いますが、女性一人で避難訓練などに参加するにはハードルが高い。子どもがいれば子どもを介した知り合いもできますが、単身、独身の場合はきっかけがありません。そのため、近所でなくても、災害時に助け合えるつながりをつくることを目的に、防災カフェを立ち上げました。

ⓜ：そういった場を活用してお互いに頼れる人を作っておくことが大切ですね。女性が避難所運営に参加した場合、どのようなメリットが考えられますか。

北：更衣室や授乳室、洗濯物を干す場所の確保といった、女性の課題に気づけるのは女性が多いですね。また、今は避難所に交流スペースを設けることが多いのですが、女性は自然と集まっておしゃべりができても、男性は集まりにくいんです。そのため、新聞を置いたりコーヒーを飲めるようなスペースを設けたりして参加しやすい工夫をするなど、多様な人に配慮した環境づくりは、女性の方が得意かもしれません。

ⓜ：女性視点の気づきが、みんなが過ごしやすい環境づくりに生きるんですね。

北：避難所生活は、お風呂に入ったり洗濯をしたりと日常の暮らしそのままです。日常で必要なものを想像して、災害発生時に何を備えるか、いざというときにどう行動するか、まずは考えることから始めてほしいですね。

WHAT'S
machico防災部とは

仙台・宮城の人とまちを元気にする地域コミュニティサイト
「せんだいタウン情報machico」の編集部員が、
防災・減災に役立つスキルを体験して発信する「部活動」です。

machicoから
アーカイブが
見られます！

女性の視点で災害時を考えてみよう

普段の準備

自分に何が必要かを考え、自分用の非常持出袋を用意しよう。旅行の準備をするような視点で楽しみながら行うと、自然と必要なものが見えてきます。

避難の基準を考えておく

いざというときの行動計画「マイ・タイムライン」を考えることも大切。災害の内容やレベル、家族構成に応じて、在宅避難か避難所に行くかなどの基準を自分なりに決めておきましょう。

高齢のご家族がいる場合

高齢者が自力で避難所に行けるか事前に確認を。散歩のついでに避難所まで歩いてみるのもおすすめです。また、自宅が被災したときを考えて、常用薬は取り出しやすい場所へ。

お子さんがいる場合

子どもは避難所の広い空間が楽しくて走り回ってしまうことも。避難グッズにおもちゃを加えておくと◎。子連れ家族が肩身の狭い思いをしないよう、みんなで見守る雰囲気づくりも大事です。

単身女性の場合

日ごろから助け合える仲間をつくっておくと安心。
水害や台風などで知人宅に避難する場合は、発生が予想されている段階で
事前に連絡をしておくと、受け入れ側も準備ができます。

POINT!

◎災害時の生活をイメージする

避難する際の基準や避難先での生活を、
事前に考えておくことが重要。
非常袋を買って安心せず、中身のチェックも忘れずに。

◎結果的に防災につながる「結果防災」

避難所まで散歩してみるなど、日常の行動が生きる「結果防災」を意識。
日用品を非常時に役立てるフェーズフリーの考えもその一つです。

災害が起こった時、
自宅や職場付近にはどんな危険があるのか、
知っておくことも大切ですね！
避難所での生活も知っておくと、
避難する時判断に迷わずに済みそうです。
自分の生活を振り返りながら、
災害時の行動について考えてみたいです。

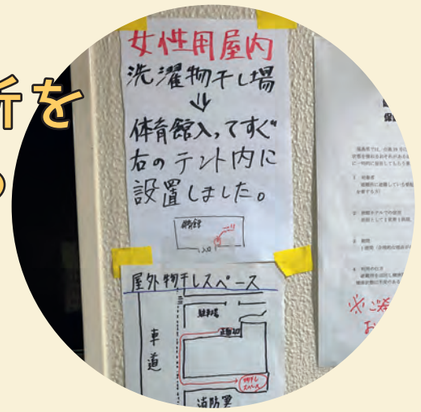
じぶんごとワーク

避難所生活に、女性視点の気づきを取り入れてみよう

避難所は災害から身を守る場所ですが、自宅が被災した場合は一時的な生活の場にもなります。
お互いが協力し合い、安心して生活するために、
女性の視点で避難所生活のルールを考えてみましょう。

洗濯や干す場所を男女で分ける

人に見られたくない下着などもあるので、洗濯物を干すスペースは男女別にし、外から見えない配慮も忘れずに。洗濯機の台数に余裕があれば、洗濯機自体も男女で分けるとより安心です。



実際の避難所の様子（提供：北村育美さん）

交流スペースを設ける

情報交換や安否確認のためにも交流スペースは大切。食事ができるテーブルを置けば、単身者の孤独感も紛れます。男性の目を気にせずメイクをしたり、支援物資の下着を選んだりできる女性専用スペースを設けるのも手。

積極的に手伝いをする

動ける人は積極的に避難所運営に関わるのがおすすめ。顔見知りも増え、役割があることで居場所もできます。その際は、負担に偏りがないよう「食事は女性の担当」などと性別で役割を決めず、できることを手伝いましょう。

避難所には多様な人が集まります。高齢者や子ども、妊婦、障害のある方、外国人など、配慮が必要な人も少なくありません。そのような人たちがいることを理解し、それぞれができることで避難所の運営に参画していくことが大切です。

監修　働き世代の女子防災プロジェクト代表　北村育美さん

ほかにも

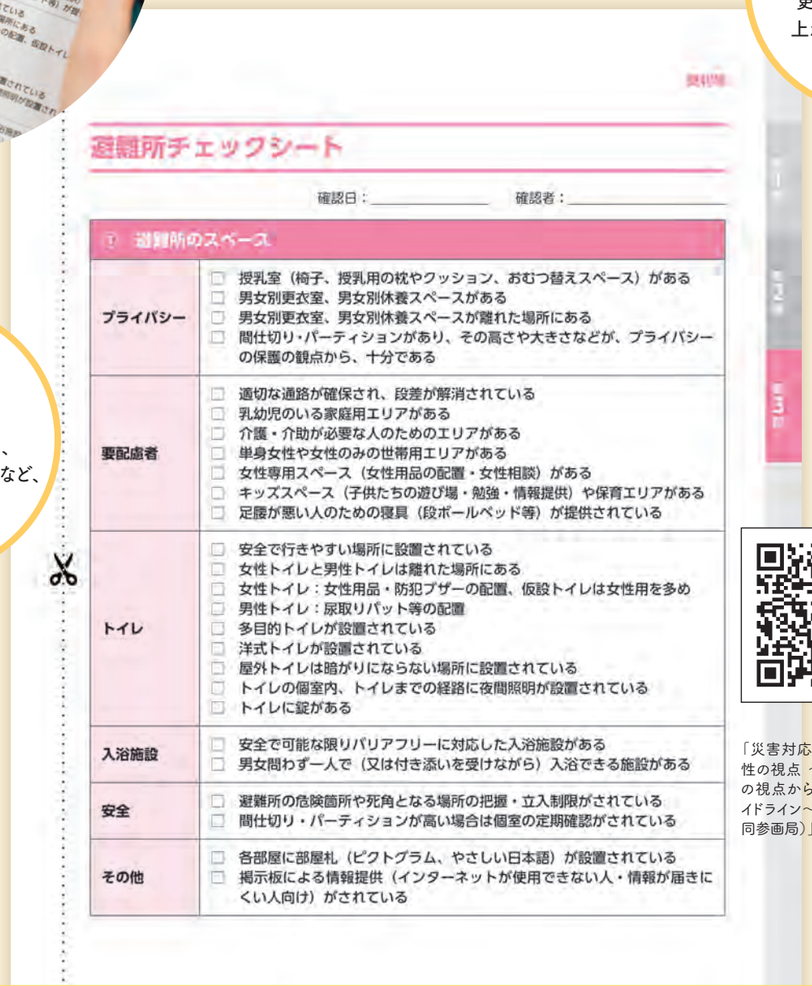
ほかにも、キッズスペースや授乳室、更衣室なども必要です。また、地域には、子どもがいるため遠慮したり、ペットがいて利用できなかったりと、避難所を選ばず壊れた自宅や車中で暮らす人もいます。避難所以外に避難している人にも目を向け、助け合いましょう。

避難所チェックシート

内閣府男女共同参画局が発行している
ガイドライン「避難所チェックシート」を活用し、
避難所での生活を考えてみましょう。

ポイント 1
更衣室を作る際は、
上からも見えないよう
天井まで覆う

ポイント 2
高齢者はトイレの近く、
子連れ家族は畳の部屋など、
要配慮者に応じた
レイアウトにする



避難所チェックシート

確認日：＿＿＿＿＿＿　確認者：＿＿＿＿＿＿

① 避難所のスペース	
プライバシー	□ 授乳室（椅子、授乳用の枕やクッション、おむつ替えスペース）がある □ 男女別更衣室、男女別休養スペースがある □ 男女別更衣室、男女別休養スペースが離れた場所にある □ 間仕切り・パーティションがあり、その高さや大きさなどが、プライバシーの保護の観点から、十分である
要配慮者	□ 適切な通路が確保され、段差が解消されている □ 乳幼児のいる家庭用エリアがある □ 介護・介助が必要な人のためのエリアがある □ 単身女性や女性のみの世帯用エリアがある □ 女性専用スペース（女性用品の配置・女性相談）がある □ キッズスペース（子供たちの遊び場・勉強・情報提供）や保育エリアがある □ 足腰が悪い人のための寝具（段ボールベッド等）が提供されている
トイレ	□ 安全で行きやすい場所に設置されている □ 女性トイレと男性トイレは離れた場所にある □ 女性トイレ：女性用品・防犯ブザーの配置、仮設トイレは女性用を多め □ 男性トイレ：尿取りパット等の配置 □ 多目的トイレが設置されている □ 洋式トイレが設置されている □ 屋外トイレは暗がりにならない場所に設置されている □ トイレの個室内、トイレまでの経路に夜間照明が設置されている □ トイレに錠がある
入浴施設	□ 安全で可能な限りバリアフリーに対応した入浴施設がある □ 男女問わず一人で（又は付き添いを受けながら）入浴できる施設がある
安全	□ 避難所の危険箇所や死角となる場所の把握・立入制限がされている □ 間仕切り・パーティションが高い場合は個室の定期確認がされている
その他	□ 各部屋に部屋札（ピクトグラム、やさしい日本語）が設置されている □ 掲示板による情報提供（インターネットが使用できない人・情報が届きにくい人向け）がされている

／「避難所チェックシート」全項目はこちら／

「災害対応力を強化する女性の視点 ～男女共同参画の視点からの防災・復興ガイドライン～（内閣府男女共同参画局）」をもとに作成

自分が避難所運営でできることを書き出してみよう

-
-
-
-
-

あしたのクリエイティブ

vol.10

アイリスオーヤマ株式会社の 低温製法米

東日本大震災が転機に精米で食を通じ復興へ

東日本大震災が大きな転機となり精米から、パックごはんや飲料を中心とする食品事業を開始、成長を続けるアイリスオーヤマ株式会社。広報室の今泉真紀さんにお話を伺いました。

「震災では弊社も被災し、本部機能がある角田I.T.P.では全てのインフラが停止。天井や壁が落ち、倉庫も荷物が崩れた状態でしたが、一刻も早く生活に必要な物資を届けなければと必死で供給体制を整えました。そんな中、〝東北地方の基幹産業である農業支援こそが、この未曾有の震災の復興支援として最も重要なものである〟と意見が一致した企業がありました」と今泉さん。

その企業は、東北で約300年続く農家である『株式会社舞台ファーム』。復興を願う企業同士でやりとりを重ねるうち、震災で多くの米農家が存続の危機にある現状を知ることになったといいます。

「東北の産業基盤は農業であり、被災地支援と農業復興を掲げて食品事業がスタートしました。2013年、舞台ファームとの共同出資により、舞台アグリイノベーション株式会社が設立されました」

国産米100%のパックごはん「低温製法米のおいしいごはん®」(180g×10食)。米と水だけで作る、味と香りにこだわった商品は備蓄用にも最適。

ローリングストックにおいしいパックごはん

精米は、おいしさにこだわった低温製法®という独自の製法を開発。お米の保管に最適な15℃以下の低温管理のもとで保管、精米、包装までを行い、お米の鮮度を保ちます。

「当時は、東北の多くの農家が適正利益を得られない農業経営に悩まされており、低温製法®による販路の確保は米の消費拡大を実現する大きな一歩でした。その後も後継者問題対策として若い生産者を対象に作付や営農のセミナーを開催するなど農業自体を盛り上げる様々な取り組みを行なっています」

2015年にはパックごはんを発売。2017年から自社工場で生産を開始し、酸味料やph調整剤を使わずに、米と水だけで作る、おいしさにこだわった商品です。

「パックごはんは炊き立てみたいな味がすると好評です。今後は仙台市の次世代放射光施設ナノテラスでおいしさを可視化する取り組みが本格的に始まります。またパックごはんの賞味期限は製造日より13ヶ月。非常食、ローリングストックに向く商品です」と今泉さん。

復興への想いから生まれた低温製法®で作ったパックごはんは2022年から台湾にも輸出。さらなる成長を続けています。

今年1月1日に発生した令和6年能登半島地震では、いち早く被災地に低温製法米をはじめとする救援物資を届けた。現在、宮城県内では角田市、仙台市、気仙沼市、石巻市と包括連携協定を結んでいる。

Vol.10

施設1 キーワード □津波被害を知る □証言を聞く □避難を考える □復興を感じる

語り部紹介＠気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館

きてみて in 〈気仙沼市・女川町・石巻市〉

語り部
福岡未央さん(右)
(16歳・高校1年生)気仙沼市
佐藤憂奈さん(左)
(16歳・高校1年生)気仙沼市

佐藤さんは語り部を始めて半年。福岡さんは大谷中学1年時から始め、4年目になる。

相手の理解度に応じてコミュニケーション

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館は、宮城県気仙沼向洋高等学校の旧校舎を、震災当時のままの状態を保ちながら活用している施設です。海岸から約500メートルの距離にあり、津波は4階の床上まで到達しましたが、生徒や教職員は高台へ避難したり、屋上に駆け上がったりして命を守りました。

公開されている南校舎は、車や木などあらゆるもので破壊された教室や巨大な冷凍工場が激突した外壁の痕跡が「展示物」として当時の惨状を伝えます。それについて月に一度の「みんな語り部」の日には、中学生や高校生が館内を案内します。気仙沼向洋高校1年でKSC(向洋語り部クラブ)に所属する福岡未央さんと佐藤憂奈さんは、来館者とのコミュニケーションにおいて、震災当時の状況を単に事実として伝えるだけでなく、一人ひとりの来館者に寄り添った表現で説明しています。

「先輩や大人の語り部の話を参考にしながら、自分の言葉でコミュニケーションを取ることを心がけています。大人なら私の説明が多少分かりにくくても理解してくれますが、子供はそうではないので、ちゃんと伝わるように工夫して話し方を変えています」と福岡さん。

佐藤さんは、「お客さんがうなずいてくれると、伝わっていると感じて嬉しくなり、励みになります」と語ります。

2人には震災の記憶はほとんどありませんが、気仙沼向洋高校の生徒としては非常に身近なできごと。福岡さんは、「震災の記憶を風化させないためには、震災後に生まれた世代にどう伝えていくかが課題です。また、修学旅行生を案内したときには、私と同じ世代でも違う環境で育った人たちに伝える難しさを感じました。理解度には本当に個人差があるので、もっときちんと伝わるように常に工夫をしていきたいです」と、意気込みを話してくれました。

同伝承館に勤める母親の勧めで語り部に。当初は戸惑いもあったそう。活動を通して、次第に「伝えること」自体に興味がわいてきた。

「震災のときはお姉ちゃんが私に覆いかぶさって守ってくれたそうです」と語る佐藤さん。伝承者が減っていることを知り、震災のことをもっと知りたい、伝えたいと思ったという。

DATA 気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館 ◎宮城県気仙沼市波路上瀬向9-1 ☎0226-28-9671 🕒[4月～9月]9:30～17:00(受付は16:00まで)[10月～3月]9:30～16:00(受付は15:00まで) 休月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始(12/29～1/4) ¥一般 600円 / 高校生 400円 / 小中学生300円 https://www.kesennuma-memorial.jp/

施設❷ キーワード ▸ □津波被害を知る □証言を聞く □避難を考える □復興を感じる □まちを感じる

東日本大震災遺構 旧女川交番

女川町の最大津波高は14.8m。引き抜かれた土の杭からも、津波の力の大きさがわかる。見守り保存のため、自然に生えてきた草木も手を加えない。

必要以上の整備はせず、あえて「当時のまま」を遺す意味

まちのメイン通りだった国道39号線沿いで、町民の安全を支えていた女川交番。鉄筋コンクリート造2階建てだった建物は、東日本大震災の津波で海中に沈み、引き波によって基礎部分の杭が抜かれ横倒しになったと考えられています。建物を遺すにあたり女川町が選んだのは、震災で破壊されたものが年月を経てどう変化するかを見届ける「見守り保存」でした。復興に伴い周囲はかさ上げされましたが、スロープに囲まれた建物は地面も含めて当時のまま。がれきも流れ着いた状態で残され、津波の威力をリアルに伝えます。

旧交番の屋根部分。紋章が付いていた形跡も。（2020年4月27日撮影）

この地域で震災前の地面が残るのはここだけ。かつての暮らしに想いを馳せられる場所でもある。（2020年4月27日撮影）

問 屋根を付けたり補強したりせず、自然な状態で保存する方法を選んだのはなぜでしょうか。現地で感じたことを書き出してみましょう。

答

DATA ◉宮城県牡鹿郡女川町海岸通り1（女川町海岸広場内）☎0225-54-3131（女川町産業振興課）🕒終日見学可能 休なし ¥入場料無料 https://www.town.onagawa.miyagi.jp/

遺構を囲むスロープの壁には、復興への歩みを紹介したパネル展示も。子どもから大人まで、一丸となって復興に取り組む町民の様子を伝える。

1階は執務室、2階は休憩室として使われていた。鉄筋コンクリートの建物が津波で倒壊・転倒した事例は世界的に珍しい。

悲しみの記憶と思い出が残る場所で〝私が今できること〟に目を向ける

石巻市の震災遺構である門脇小学校とともに、東日本大震災の教訓を後世に伝える「石巻市震災遺構大川小学校」。犠牲者の慰霊・追悼の場であり、かつてここにあった町並と人々の営みや賑わいに思いを寄せながら、防災意識や生きること、命について考える場にもなっています。

津波がもたらした様々な被害の痕跡が残る校舎は、柵外からの見学が可能です。また隣接する「大川震災伝承館」では、かつての地域行事やふるさとの記憶を描いた美しい風景画や学校で使用されていた思い出の品などを展示。地域の人々の声や津波被害をめぐる裁判の記録も発信しています。

多目的スペースも設けられた「大川震災伝承館」。丁寧に聞き取った住民の声も更新型の展示として発信し続けている。

施設❸ キーワード ▸ □津波被害を知る □証言を聞く □復興を感じる □アートを見る

石巻市震災遺構大川小学校

あちこちに津波の痕跡を残す校舎。周囲には豊かな自然があり、自然との共生を考える機会も提示している。

DATA ◉宮城県石巻市釜谷字韮島94 ☎0225-24-6315 🕒震災遺構大川小学校9:00～17:00 休なし〈大川震災伝承館は毎週水曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始、※特別閉館日あり〉¥入館料無料 https://www.ishinomakiikou.net/okawa/（大川震災伝承館についてもこちら）

問 津波被害の様子を掲示した解説パネルやメッセージを見て、どんなことを感じましたか？ その思いを書き出してみましょう。

答

〈右上〉敷地内に設けた解説パネルとメッセージ。メッセージはかつてあった穏やかな生活を想起させ、見る人の防災意識にスポットを当てる。〈右下〉校舎の教室棟と屋内運動場をつないでいた渡り廊下部分。渦を巻いたような津波が、柱ごとねじ倒したという〈左下〉8.6mの津波に襲われた大川小学校。凸状に盛り上がった2階の床や波状痕が残る天井から、すさまじい津波の威力が伝わる。

きてみてマップ

きてみてで紹介した施設のほか、
特集・あしたのクリエイティブで紹介した場所も
記載しています。

今号で紹介した仙台エリアの伝承施設までのアクセス

- 飛行機：仙台国際空港 → 仙台空港アクセス線 約25分 → 仙台駅
- 公共交通機関：東京駅 → 東北新幹線 約90分 → 仙台駅
- 仙台駅 → JR仙石線・仙石東北ライン 仙台駅～石巻駅（約60分） → 女川駅
- 【石巻駅】JR石巻線 石巻駅～女川駅（約30分） → 女川駅
- 自動車：東京 → 約4～5時間 → 女川

立ち寄りスポット

1 道の駅おながわ

新鮮な海の幸を味わえる市場や、地域の特産品が並ぶ直売所など、魅力が満載の複合施設です。地元市場ハマテラス内のトイレや授乳スペース、情報コーナーは24時間利用可能です。

DATA 宮城県牡鹿郡女川町女川2丁目66番地 0225-24-8118 各施設によって異なる 各施設によって異なる https://onagawa-mirai.jp/

2 MASH PARK ONAGAWA

「子どもたちに最高の笑顔を届けたい。」という思いのもと、マッシュグループが手がけた公園。海の生き物をモチーフにした色彩豊かなアートが彩る創造性育む夢いっぱいの遊び場です。

DATA 宮城県牡鹿郡女川町海岸通り2番地 24時間 なし https://mashgroup.jp/mashparkproject/mp_onagawa.html

3 ホテル・エルファロ

パステルカラーの国産トレーラーハウスが並ぶホテル。街中サイクリング、バーベキュー、焚き火なども楽しめる、くつろぎ空間と大自然とがつながる「アウトドアリビング」がコンセプトのホテルです。

DATA 宮城県牡鹿郡女川町女川2丁目1番地の2 0225-98-8703 なし https://hotel-elfaro.com/

いまを発信！復興みやぎ

宮城の復興の「いま」を
SNSでお伝えしています！
皆さまからの投稿も
お待ちしております！

LINE　Facebook　X（旧twitter）　Instagram

Baton　発行元　宮城県震災復興本部（事務局：復興支援・伝承課）
〒980-8570宮城県仙台市青葉区本町三丁目8番1号　TEL：022-211-2443
宮城県 Miyagi Prefectural Government